

キウイフルーツの整枝せん定

第1報 主枝延長枝の切返しおよび誘引方法

緒方俊雄・古原剛二・松本誠司・*広瀬正純 (大分県農業技術センター・*大分県農水産物加工総合指導センター)

Toshio OGATA, Goji KOHARA, Sciji MATSUMOTO and Masazumi HIROSE: Pruning-method of Kiwi Fruit.

1. Methods of Cutting and Training for Growth of Primary branch

キウイフルーツはつる性が枝が巻付くこと、強勢な枝が出る反面負枝になりやすいこと、および雌雄異株であり緻密な間伐計画が必要であることなど、これまでの果樹とは特異であることが知られる。そのため若木のうちは整枝の骨格づくりに重点をおき、主枝数を少なくし強勢に伸ばして、無駄枝をおさえて樹冠の拡大を図る必要から、主枝延長枝の取扱について実験したので、その概要を報告する。

1. 材料および方法

1) 主枝延長枝の切返し程度 ハイワード4年生樹を用い、主枝延長枝の伸長量により長大な枝 (250cm以上)、中庸の枝 (150~249cm) および短い枝 (150cm以下) の3段階に、切返し程度を1/3, 1/2および2/3で、1区6主枝とした。新梢は水平に誘引し、摘心はしなかった。

2) 生育期の管理 ハイワード3年生樹を供試し、主枝延長枝の5月中旬の伸長量により3段階に分け、新梢の角度と誘引および摘心の有無の組合せにより、その後の伸長量と翌年の着花状況をみた。誘引区は枝の伸びにしたがって巻付けば伸ばしながら1週1回誘引結束、摘心区は枝の角度を設定できる最も基部で1箇所固定し巻き始めれば摘心、放任区は角度を固定したのちは放任した。

2. 結果および考察

1) 主枝延長枝の切返し程度 主枝上の発芽率は切返し程度の強いほど高かった。新梢の伸長は短い枝の場合各区とも先芽の伸長がよいが、1/2せん除区が他の2倍であった。中庸の場合も同様の傾向であった。長大な枝の場合は切返し程度の強いほど先芽の伸長が優れ、1/3せん除区は先芽より強い伸長が2箇所に見られた。長大な枝においても1/2せん除でよいが、新梢伸長の分布が

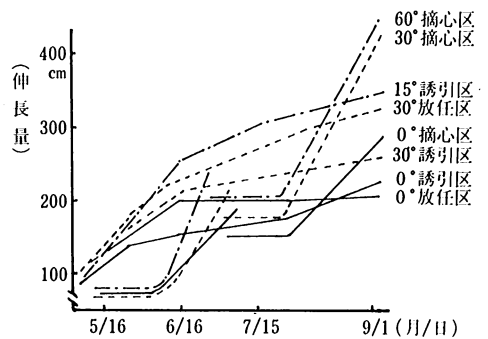
よかったのは、およそ220cm以内を残してせん除した場合であった。

主枝延長枝の切返し程度は、発芽率および部位別伸長量に影響し、水平誘引の場合枝の強弱を問わず1/2程度に切返すのがよく、単年度の主枝形成はいかに強勢な枝でもほぼ220cmが限度で、ブドウと同等と考えられる。

2) 生育期の管理 枝の角度と生育は処理後1週間ころから伸長に差がみられ、3週間目からその差が急となり枝の角度の高いほど生育がよかった。枝の角度による生育差が最も大きいのは放任区で、次いで摘心区で誘引区は小さかった。

次に誘引結束、摘心などの処理と生育では、摘心区は摘心によって一時的には生育が遅れるが、7月以降の伸長量は最も大きく全伸長の50%を越え、特に弱い枝では他区より伸長量が大きくなった。強勢な枝では放任区の伸長が最もよかった。

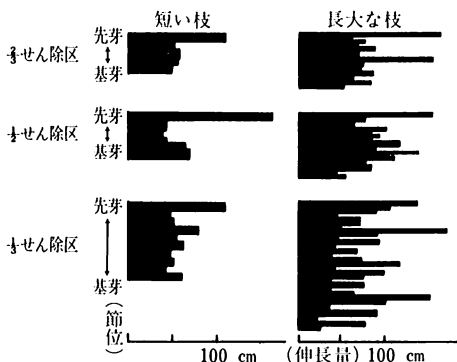
翌年の着花は伸長量が大きいほど多いが、遅伸びした枝では着花が少なかった。すなわち摘心等によりその後強勢に伸びた場合、摘心部より下部には着花が少なくなった。



第2図 誘引方法と新梢の伸長 (弱い枝の場合)

生育期の枝管理は主枝延長枝の角度15°以上上げて誘引することでおう盛に伸長する。誘引結束は新梢の節間が十分伸長した箇所で行えば新梢の湾曲が少なく、自然の巻付きにまかせ、強く巻けば摘心し再伸長を促す。

以上の結果、主枝延長枝の切返しは1/2でよく、生育期はこの誘引方法によって主枝形成が容易となるばかりでなく、負枝や過繁茂を防止できるものと思われる。



第1図 主枝の切返し程度と新梢伸長状況